

E.キューブラー=ロスの思想と死にゆく子どもの問題

—unfinished business を手掛かりにして—

教育学コース 青柳路子

Thought of E.Kubler-Ross and some issues on dying child

— unfinished business by E.Kubler-Ross —

Michiko AOYAGI

This paper describes thought of Elisabeth Kübler-Ross, who is well-known as an expert on the subjects of death and dying, or a pioneer on Thanatology. Further, according to her texts, the writer attempts to deal with issues surrounding the dying child, which come to the front by the description of her thought — especially the image of “butterfly and cocoon” symbolized Death as transition, and unfinished business.

According to her texts, unfinished business has the following three aspects: First, the problem to be solved when death of one's own is approaching. Second, the psychological stiffness, and, Third, the negative inheritance which can make a chain reaction to the next generation.

The dying child, as a human being whose death is impending, also has unique unfinished business. However, Kübler-Ross regards their siblings as more important, for their unfinished business, which extends to their subsequent lives, is more intricate and serious.

目次

はじめに

I キュブラー=ロスの研究歴

II 死の理解

—肉体の死から「蝶」と「繭」のイメージへ—

III 死を前にしての課題

—unfinished business—

IV 死にゆく子どもの問題

—死にゆく子どもと残されるきょうだい—

おわりに —結びにかえて—

はじめに

エリザベス・キューブラー=ロス(1926-)は、死の臨床家として知られている。特に、彼女の唱えた死の受容の段階説、すなわち致命的疾患の自覚から自分の死を受容するまでに辿る心のプロセスを五つの段階に示したことは、諸批判があるにせよ、医療分野のみならず、人間の死についての理解に大きな貢献をしたと言ってよいだろう¹⁾。

しかし、ロスの著作を繙いてわかることは、段階説

に限定されることのない、人々との臨床を土台にした、人間の死に関わる豊穡な土壌を有しているということである。

そこで本論文では、第一に、キューブラー=ロスのテキストに立ち返り、段階説以外の思想—特に、死の理解とunfinished businessを描出することを目的とする。そして第二に、それらの思想を、死にゆく子どもへと照射し、そこに浮かび上がる問題を検討することを試みる。

ところで、本稿で論及しようとする死にゆく子どもとは、どういった子どもたちなのか。それは自分の死に至ろうとする過程を生きている、また生きていた子どもでもある。突然死や自殺などではなく、死に至る病に罹り、患いながら、自分に訪れる死を迎えようとしている(迎えた)子どもたちである²⁾。医学の進歩によって、病気のために子どもがいのちを失うことは、より減少してきていると言われるが、そう言われている今日でさえ、大人にならないまま死を迎えていく子どもたちがいることは、紛れもない事実である³⁾。

本論文では、キューブラー=ロスがこのような子どもたちと臨床を重ねていたという事実に着眼し、彼女の思想から、dying childを取り巻く問題を顕在化していくことになる。

ここで、キューブラー=ロスの思想の研究状況を述べておこう。

まずロスが活躍したアメリカでは、臨床死生学者を名乗るシャバンが体系的な研究を行っている⁴⁾。シャバンは、アメリカやカナダで終末期ケアの基盤とされてきたキューブラー=ロスのパラダイムを検証し、20世紀に発展をみたターミナルケアのあり方を見直すことを目的とした。そして、ロスのパラダイムが精神分析の流れから生まれたものではなく、終末期ケアと取り組む中で生まれてきたものとして位置づける。この研究は、年月を追い、原典を基に検討されており、ロス研究の大きな位置を占めている。しかしシャバンの主眼は、段階説およびロスが用いてきた方法論の検証であって、本稿とは趣を異にする⁵⁾。

次に、日本では、人間学から、田中毎実の次のような理解がある。ロスの理論では、「死の受容」の具体的な内容把握が不十分であることを指摘しつつ、一方で「死をめぐる相互的形成的連関」について、かなりの議論が展開されていることを評価する⁶⁾。田中が着目する「相互的形成的連関」とは、死に至る過程で、死にゆく人と、遺される者との間に形づくられる連関である。死を迎えようとする人は、「捨て身の自己投企によって、とりまく人々すべてに対して『受容』が何であるかと教える『教育者』である⁷⁾。これは、ロスが臨死患者を生や死について教えてくれる「教師」と述べていることに関係する。短いが、非常に濃密な時間となるdyingプロセスにおいて、「教育者」としての末期患者と、「教えられる者」としての遺される者の間には、それぞれ己の死と、愛する者の死を受容しながら、相互に関係して形成される人間的成熟が展開されるというのが田中の理解である⁸⁾。

田中は、先に死を迎えることになった臨死者を年長の者と必ずしも限定していないが、「相互的形成連関」が異なる世代間の連関として論じられており、死にゆく者が先の世代、遺される者が次の世代という前提があることが窺える。それは、臨死者を「教育者」と捉え、世代間に「教える・学ぶ」という教育的関係を導き出していることから明らかである。

それに対して、本論文では、次の世代に当たる子どもが死を迎えるということに重点を置いて論じていく。死にゆく子どもは、大人に達していない「子ども期」を生きているときに、親に先立つ子どもであり、いわば逆縁の世代関係が引き起こされる。そこでは、異なった世代関係が見出されることになる。

こうして本論文は、これまで特に取り上げられてこ

なかったロスの側面、すなわち、その思想と死にゆく子どもとの関わりに光をあて、更に死にゆく子どもへと視点を転じたときに顕在化される問題を論じていきたいと考える。

以下、まず第1章で死や、死にゆく子どもたちに関わるキューブラー=ロスの研究歴を辿る。第2章、第3章はテキストにしたがって、それぞれ彼女の「死」の理解と、unfinished businessを描出する。最後に、第4章では、前二章を承けて、死にゆく子どもについて論じていく。

1 キューブラー=ロスの研究歴

キューブラー=ロスの仕事をみるためには、その生涯に触れておく必要があるだろう。

ロスがアメリカを舞台に活躍した人物として知られているが、実はスイスの出身である。1926年、彼女は三つ子姉妹の末子としてチューリヒに生まれた。後に記した自伝では、三つ子として生まれ成長したことを「かなりの心の重荷」であったと回想している⁹⁾。そして二人の姉と自分の違いがわからず、「子ども時代のすべての時間が『自分とは誰か』を知ろうとする試みに費やされた」という。しかし、この「自分」の模索こそが、義務教育を終えて姉妹それぞれの道が見出される時に、ロスに自分の道を切り開かせ、医師へと導かせたと言えるだろう。そして医師免許を取得後1958年に、アメリカ人との結婚を機に渡米する。

ところで、キューブラー=ロスが自伝で次のように述べていることは、注目に値しよう。

「死とその過程に関する研究で、私がいちばん影響を受けた精神医学者はC・G・ユングだった¹⁰⁾。ロスは、医学生であったころ、チューリッヒの街でしばしばユングを見かけていた。しかし遂に声をかけることはなかったという。死に関する研究におけるユングからの思想的影響について語っているのは、テキストでは後にも先にもこの部分のみしか見られない。しかし、ユングとの関連で見出されるように、ヨーロッパ的な要素は、アメリカに移った後でも、ロスの中に残されていたと言えよう¹¹⁾。

渡米後のロスが最初に担当したのは、重度の精神障害者であった。当時のアメリカおよびその医療では、治療・回復不可能と見なされ、劣悪な病院環境に置かれていた患者たちであった。ロスは、院内環境を改善し、患者一人一人の声を聴きながら治療を行うことで、見事にその94%を社会復帰させた。

患者一人一人に向き合う医療姿勢は、死にゆく人びととの臨床でも同様であったと言えるだろう。

当時はターミナルケアやホスピスといった終末期医療がまだ黎明期であったから、病院で迎えられる死が、特に医者にとっては認め難いものであったのは想像に難くない。事実、シカゴ大学のセミナーで教室に招いた末期の患者を相手に「死についてどう思いますか?」と、正面から死について問いかけたキュブラー=ロスは、同僚の医者たちから強い反発にあった¹²⁾。しかし、重度の精神患者と同じように、医療の傍らに追い遣られていた終末期患者に対する姿勢をロスが貫き、臨床を続けたことが、1969年の処女作*On Death and Dying*に結実していく。この著書は、医療が見過ごしてきた末期患者の存在に光をあて、その心理変遷を段階説として提示したこと、医療が及ばなくなった人びとに対しても、十分なケアの必要性を説いたことで、国際的にも反響を及ぼし、ロスにとって大きな仕事になった。しかし、大学在職中にNear Death Experience(以下NDEと表記)をした患者と出会ったことを契機に、このころには既に、ロス自身の関心はトランス・パーソナルな領域へ傾いていた。間もなくロスは大学を後にし、1970年から独自のワークショップを開催し、大学やセミナーという枠を離れて、死を迎えようとする人びとや、愛する者を失った家族などを対象にした臨床を継続した。そしてワークショップは、やがて直接死に関わらない人びとも包含し、より広範なものへと展開していくことになる。

一方、病気の子どもたち、特に死にゆく子どもとの関わりは、どのようであったのか。

ロスは、セミナーを開催中に、盲目で生まれてくる子どもたちと関わっていた。しかし、それは必ずしも積極的な関係性であったとは言い難い。というのも「末期の子どもたちに、自分の子どもたちの面影を重ねてしまう」と語っているように、ロスが子どもたちの母親でもあったことが、子どもたちとの臨床に身を投じることを戸惑わせたのである¹³⁾。

しかし、子どもへの関心が従来から高かった彼女は、大学病院を辞してからの約5年間ほど、小児病院に籍を置くことになる。ここで、死を迎えようとしている子どもたちを見ることに感じていた躊躇いが払拭され、子どもたちとの積極的な関係が生まれる。そして、「始めから子どもたちを見てこなかったことを後悔した」という。こういった背景から、ロスは、臨死者の中でも、特に死を控えた子どもとの関わりと関心を増していき、「死にゆく子どもがもっている知識、知恵、

疎通性などの深さに興味を惹かれ、理解を深めていった¹⁴⁾。

死に瀕した子どもたちへの関心は、1980年代にエイズが国際的な話題となってから、生まれながらにしてHIVに感染している乳幼児の治療と看取りの意欲へと受け継がれた。誕生時からエイズ患者として社会に受け入れられていく子どもたちを収容し看護するための施設の建設にロスは動くが、地元住民の激しい反対や、不審火で自宅を失ったことなどから、その思いを叶えることはできなかった。これをきっかけに、ロスは公の仕事から引退し、現在は病床にありながら、執筆を続けている。

II 死の理解 —肉体的な死から、「蝶と繭」のイメージへ—

キュブラー=ロスは、そもそも死をどのようなものと捉えていたのだろうか。

死の理解を、その著書に求めていくと、処女作では「死は(中略)肉体機能の穏やかな停止であることがわかる」と記されている¹⁵⁾。大学に属する医師の一人として患者に接し、医学生教育を考えていた当時、ロスは、死を肉体の終わりとして捉えていた。死が肉体の死である以上、「生は有限」である¹⁶⁾。つまり、このロスの死の理解は、いのちは人間の肉体の死で終わるといふ、医学での死の定義の域を脱していない。

しかし、初期にはそのように述べていたロスに、変化が生じる。そして、後期に専ら語られるのは、死は「移行transition」であるという理解であった。この理解は、1981年の*Living With Death and Dying*から述べられ始め、同書では死を迎えていった人の事例と共に、「私たちが死と呼ぶ移行を成し遂げた」と記されている¹⁷⁾。

では、この「移行」とは、具体的にどういうことなのか。

ロスが移行としての死を語る時、重要な鍵となるのが「蝶と繭」のイメージである。そのイメージが、それぞれ何を象徴しているのかといえば、まず「繭」は、「物質的な身体」であり、「人間存在の外殻」である¹⁸⁾。そして、「蝶」にとっての、この世での「仮の住まい」である¹⁹⁾。

一方の「蝶」は、「繭」という肉体に閉じ込められた「私たちの内なる自己」であり、「すべてを知っている」「自分の霊的な部分」で、肉体の死の後にも存続する「不死で不滅の部分」である²⁰⁾。それは、古くから用いられてきた蝶のイメージでもある、永遠の「たましい」の姿である²¹⁾。

この世では「繭と蝶」、つまり「肉体」と「たましい」から人間は成り立っているが、死という「移行」によって、私たちは「繭」である「肉体」を脱ぎ捨てる。キューブラー＝ロスが「移行」と語る死の瞬間は、たましいが飛翔していく、まさに「不滅の部分が肉体的な殻から解き放たれ」る、「繭」から「蝶」へのメタモルフォーゼのときである²²⁾。

この死の理解の転換によって決定的に変化したのは、生は死で終わるのではなく、新しい存在形態へ継続するものと捉えられている点である。つまり、死は生の断絶ではなく、死後も連続する、もう一つの生への結節点となっているのである。

それでは、なぜこのような理解の転換が起こったのだろうか。

キューブラー＝ロスの死への探究が、死後の生に及んだことが、その理由として挙げられる。第Ⅱ章でみたように、それは、セミナーの開催中に、NDEを体験した患者と遭遇したことから始まった。医学の枠では捉えることのできない次元との接触は、大学でまだ医者として末期患者との臨床にあたり、死後の生を「死の否認の一形態」と考えていたロスにとって、大きな揺さぶりであったに違いない²³⁾。死とは何であるのか。それまでの死の理解、つまり肉体の死に限られないところから、ロスは死を探究し始めた。その糸口となったのが、NDEの事例である。ロスは国際的に事例を収集し、それを基に、事例実証という学問的手続きを踏まえて「死後の真実」という、死後の生を公に語るほどに確信する²⁴⁾。

しかし、公言する以前に、ロスの私的な面では、確信への土台は生まれていたと考えられる。それは、死にゆく子どもたちの存在から明らかになる。ロスは先述の「蝶と繭」のイメージを、死は移行であると主張する以前に、既に子どもたちに向けて語っていた。

1978年、死にゆく子どもの一人であったダギーが、次のような問いをロスに投げかけた。

「生きるってなに？死ぬってどういうこと？それから、どうして小さな子どもが死ななければならないの？」

これに答えた手紙の返事で、ロスは次のように言っている。

「地上でしなければならないことを全部することができたら、私たちはからだを脱ぐことがゆるされる。繭が蝶を閉じ込めているように、私たちのたましいを閉じ込めている、からだを。」²⁵⁾

ここでは既に、蝶は「たましい」として、繭は「から

だ」として描かれている。つまりロスは、死後の生を確信し、死が移行であると述べる以前に、死が「蝶と繭」のイメージに集約されるものとして捉えており、それを特に死に瀕いた、あるいは身内の死に出会った子どもたちに対して、語っていたのである²⁶⁾。公に死後の生が述べられる以前から、キューブラー＝ロスは、このイメージを用いて、移行としての死の理解を育てていたと考えられるだろう。

こうして、ロスの死の理解は、生の終わりを意味する死、あるいは医者としての肉体機能の終わりを意味する死から、死後の生へと連なる移行の瞬間へと、転換していったことになる。

Ⅲ 死を前にしての課題 —unfinished business—

ロスが死を控えた人びととの出会いによって死の理解を転換させてきたように、彼らとの臨床の過程で見出されてきたもの、それがunfinished businessである。では、この概念は一体何を指すのだろうか。

それをここで簡略に述べてしまえば、<死を前にした課題>、また<心のしこり>であり、何らかの解決をみなければく次世代へ受け継がれる可能性のある負の遺産>である。

キューブラー＝ロスがこの概念を用いた背景は、明らかではない。但し、この言葉はゲシュタルト心理学で用いられており、そこでは「したくてもできなかったこと、言いたくても言えなかったことが、いつまでも心残りの場合」を指している²⁷⁾。

ロスがゲシュタルト心理学に学び、それが自身の概念形成に影響を及ぼしていたであろう可能性は否定できない。しかし、それには収まりきらない特性をロスの言うunfinished businessは有しているのである²⁸⁾。では、その特徴とはどこにあるのか。

まず第一に、それは<死を前にした課題>という側面に示されている。

「何らかのunfinished businessのために、生にしがみついている患者もあった。たとえば、知的発達の遅れたきょうだいがいるのに、自分の死後、その面倒を見てくれる人がいないと心配する患者や、子どもの世話をしてくれる人が見つからず、誰かにその不安を聞いてもらう必要のある患者などだ。」²⁹⁾

処女作中のこの表現にみられるように、当初それは、遺される家族の行く末の安定や、携わっている仕事の処理などに関係していた³⁰⁾。しかし、臨死者の<死を前にした課題>は、それに尽きるものではない。

死と対峙することは、それまでの人生の振り返りや、さまざまな心理的葛藤と共に、実存的な深い思索をもたらすことは、これまで人類が残してきた死についての膨大な考察が示してくれている。テキストでは、末期の男性患者が、かつて迎えた娘の死を十分に悼みきれていなかったことがきっかけで、妻との間に感情のわだかまりを残し、自分の死が迫っているにも関わらず、未解決のままの感情に悩んでいた例が挙げられている³¹⁾。

このように、己の死が迫り、死にゆく過程にあるとき、なおざりにし、押し殺してきた様々な感情が彷彿としてくる。そして目前に迫った死に対する恐れのためではなく、日常では無意識下に抑圧してきた、嘆き、悲しみ、怒り、悔恨、罪悪感といった感情のために、平穏な死を迎え入れることが妨げられている。ロスはこの点に着目し、押し殺してきた感情を解決することを、〈死を前にした人たちの課題〉の一つと捉えたのである。

しかし残念ながら、この男性の事例に表れている未解決のままの感情を指すために、処女作ではunfinished businessという言葉は用いられていない。しかし、ロスが目指し援助してきた「恐怖や不安のない、平安で冷静な死を迎える準備をするために」は、これらが妨げとなっていることへの気づきがあった。また以後の著作では、抑圧するなどして「歪められた感情」が、解決しなければならない課題につながると述べている³²⁾。こうしたことから、処女作を著した当初には未解決の感情がunfinished businessの範疇にはなかったが、〈死を前にした課題〉の一つとして、ロスの理解の射程に入っていたことが考えられる。

ところで、先の男性の事例では、娘の死を契機に未解決の感情が生まれていた。人間の死が、生きている人間に対して解決できない感情を生み出し、しこりとなって残る。ここで第二に、人間の死に起因する〈心のしこり〉としてのunfinished businessの側面が登場する。

亡くなった人とは、再び会うことは出来ない。特に死を迎えた人が家族の場合には、失ったことの悲嘆の大きさからいって、より深い感情を抱え込み、それを抑圧し蓄積してしまう可能性が高くなる。ロスと言う。「悲しんではいけないと恐れること、それがunfinished businessに繋がる」³³⁾。失った悲しみを押し殺すことも〈心のしこり〉となってしまふのである。

以上のことから、ロスのunfinished businessは、死にゆく過程にある者にとっては、〈死を迎える前に解決しておかねばならない課題〉であり、また遺される

者、特に家族にとっては、後の人生にも背負っていきかねない〈心のしこり〉となるもの、として理解できる。ロスのこの概念は、死と真正面に向かい合い、肉体の苦痛を体験し、心理的にも葛藤しながら死を受け容れ、亡くなっていった人びとや、その家族の臨床の上に形成されている。死を無くしては、語れない側面があることは、強調されねばならないだろう。

このdyingプロセスにおいて、特に顕著に見出された課題の解決こそ、ロスが開催したワークショップの主題であった³⁴⁾。ロスは己の死、あるいは愛する人の死の問題を抱えた人びとの課題解決の場を設けた。それは後に、死に直接関わりはなく肉体的には健康でも、心理的に大きなしこりを抱えた人びとにとっても解決の場となっていく。

しかし、ここまでの理解では、次の文章が理解できないことになる。

「子どものころ殴られたり、性的な虐待を受けたりすると(中略)大人になったとき子どもを殴る可能性が高い。なぜなら、心の中の解決できなかった憤り、怒り、いらだちがはげ口を求めるからだ。」そして「成長して自分の子どもをもつ前に問題を解決しておかないと、それが次の世代に持ち越されることになる」³⁵⁾。

この「心の中で解決できなかった憤り、怒り、いらだち」は、先の、しこりにあたるものである。しかし、それらは、子ども期に受けた精神的外傷に起因し、次世代にも受け継がれることがあるという。この点から第三に、ロスのunfinished businessには〈次世代へ連鎖していく可能性をもつ負の遺産〉としての側面があると理解せざるを得ない。

死を目前に控えたわけではなくとも、世代のもたらす歪みが、心の中で解決できない感情を蓄積させる。しかもそれが、自分の子へと投影され、また後の世代にも影響を及ぼしていく可能性をもっている。ロスは、ワークショップで、直接死には関係していない人びとから、次世代へと連鎖していく可能性としてのunfinished businessの側面を見出したのであった。

以上を総括すれば、キュブラー=ロスのいうunfinished businessとは、死に関わる課題—「自分の死を前にして、この世で終えておかねばならないこと」、そして安らかな死を迎えるために、「解決しておかねばならない抑圧してきた様々な感情」である。更に、「生きることを困難にしている、心のしこり」であり、またそれが解決されない場合には、「次世代へと受け継がれてしまうもの」であると理解できるのである。

ところで、これらの課題は、解決されうる見通しを

もっていたのだろうか³⁶⁾。

実際のところ、解決を目指したロス自身が言うようにunfinished businessを終わらせるということは、「言うに易く、行うに難い」³⁷⁾。また、世代の問題から言えば、解決をみたからといって、次の世代は「もちろん、精神的外傷は体験せざるを得ないし、遺伝的に受け継がれる疾患もなくなりほしくない」³⁸⁾。それを、彼女は充分承知していた。

そうでありながら、なぜ解決することにこだわったのか。それには、unfinished businessを抱えた多くの人々の存在があったことは言うまでもないが、死を迎えて行った人間が、課題から解放され、残り少ない生を生きた姿をロスが目にしてきたことが、もう一つの大きな理由として挙げられる。

「死ぬ時を待つまでもなく、私たちは不治の病に倒れる以前に、unfinished businessや恐れ、罪の意識、羞恥などに対処することができる。そして十全な生を生きることができるのである。」³⁹⁾

キューブラー=ロスが言う、この「十全な生を生きること」こそ、臨死者が課題を解決して残りの生を生きた姿であり、彼女が死にゆく人びととの臨床から学んだことであった。

こうして、ロスのテキストから描出されるunfinished businessは、第一に<死を前にした人間の課題>としての側面、第二に、死を契機に生まれる<心のしこり>、第三に<次世代へ継承されかねない負の側面>に整理されよう。しかし、この概念は、一つの訳語には収まりきらない、人間の死、そして生、また次世代への問題も包含する、多様な側面を待ち合わせている。

IV 死にゆく子どもの問題 一死にゆくこどもと、残されるきょうだい一

それでは、子どもが死を迎えようとするときには、どういった問題があるのだろうか。

まず死にゆく子どもの<死を前にした課題>とはどんなものなのか。

ロスのテキストには、死が訪れる前に、自分の自転車に乗って家を一周するという、長く望んでいたことを成し遂げ、その大切な自転車を弟に引き継いでいくことで、自分の課題を終わらせたという例がある⁴⁰⁾。

ロスによれば、「子どもはunfinished businessの数々を抱え込んでいなかった」という⁴¹⁾。しかし、病院から家に帰って自転車に乗り、それを弟に贈るといような、「こうした一見些細なことこそが、小さな子どもに

とっては、きわめて重要なのである」。テキストにみられる死にゆく子どもの事例はわずかだが、たとえ人生が短くても、この世での生を終えようとする子どもなりの<死を前にした課題>があることを明らかにしてくれる。

しかしまた、死にゆく子どもたちが抱えているのは、一概には言い表せないものがある。

子どもの精神的世界に焦点を当ててフィールドワークを行ったコールズは、死に至る病と闘っている少年について、こう述べている。死を前にして、その少年は「何世紀も前から哲学者や神学者や作家、そして普通の人々が自問してきた問題に挑み」、「その精神は死と隣り合わせになることで活発に働いていたのだろう」⁴²⁾。

ロスもまた、死の床にある子どもが、時には「老賢者」のように「精神的に成熟し、聡明である」と述べている⁴³⁾。死を前にして、生死の意味、自分の人生の意味を問うていた先のダギーを始めとして、ロスの出会った死にゆく子どもたちも、自分の<死を前にした課題>に取り組みながら、死にゆく過程を生き、一人の人間として死と対峙していたのである。

ところで、キューブラー=ロスが、子ども期におけるunfinished businessを、より問題とした存在があった。「死に向かおうとする子どもの周りで、一番深刻な問題を抱えているのは、その子のきょうだいたちである」とロスが言うように、それは同じ家庭で育つ子どもたちであった⁴⁴⁾。それでは、彼らの抱えることになる問題とは何なのか。また、ロスが、彼らをより重要視したのは何故なのだろうか。

家族内に死を間近にした人間がいれば、家族が健康で暮らしているときとは異なって、特殊な緊張が張り詰める。逝かせることになるのが子どもならば、親にとっては特に辛い現実が襲う。しかし、親が我が子に先立たれるという不条理な現実に向かっている状態が、不幸にも他のきょうだいたちに影響を及ぼすことになるロスと言うのである。

親は、共に過ごす時間が限られたdying childに自分の関心の多くを注ぎ、「きょうだいたちに、どんな影響が及ぶかについて、こころを悩ませることもない」⁴⁵⁾。こういった状況下で、きょうだいたちは、表出できない怒りや不公平さ、差別意識を抱き、「その病気のきょうだいがいっそ死んでしまえばいいとさえ、思うようになりかねない」⁴⁶⁾。

しかし、患児が亡くなってしまったとき、その死を悲しみながら、きょうだいは、「苦々しい気持ち、不公

平にされた感じ、そして、死んでいくきょうだいに自分が敵意を抱いたことに対する大きな罪悪感を抱えたまま、取り残される」ことになってしまう⁴⁷⁾。

こうして、dying childが生きている時間にも、亡くなった後の時間でも、きょうだいたちは、「体験しているところの混乱」に気を配られることもなく、取り残されてしまう⁴⁸⁾。

いったい子どもである時期に、きょうだい死んでいくということは、残される子どもにどのような影響を及ぼすのか。死にゆくのは同じ家庭の一員であり、自分にとって特に身近な子どもである。きょうだいたちの問題には、その後の、彼らが生きる人生にも及んで、問いは尽きることがない。キュブラー=ロスが、きょうだいに着目したのは、人生のまだ早い時期から死に関わるunfinished businessを抱え込み、それが彼らのその後の長い人生に、影を落としかねないためであった。

しかし、きょうだいたちの問題は、より複雑だとと言えるだろう。上記の、きょうだいたちの具体的なunfinished businessに示されているように、彼らが抱えることになる問題には、親の存在が密接に関係してくる。ロスは次のように言う。

「最大の嘆きは『経験することのできなかつた愛』に対する嘆きである。それは、失ったものに対する嘆きよりも、はるかに大きい。これこそ最大の悲しみである。』⁴⁹⁾

この「経験することのできなかつた愛」による悲しみが、きょうだいたちの問題には、大きく起因していることが考えられる。つまり、親から愛情が得られないと感じたことが、彼らの悲しみとなり、それを解決できないままに取り残され、成長するなか抱えていかねばならなくなる。彼らは、子どものうちに、きょうだいを亡くす経験し、それを受け止める問題に取り組みながら、また、得られない愛情から生み出されたunfinished businessを、その後の人生にわたって抱えていかねばならない可能性を持っている。これこそ、キュブラー=ロスが問題視したことであった。

こうして本章では、前章で取り上げたunfinished businessを、死にゆく子どもを取り巻く問題にも当てはまるものとして取り上げてきた。死に向かう子どもが、彼らなりの、死を前にした課題を抱えていること。そして、子どもが死を迎えることで、親たちの他にも、身近な家族である、きょうだいたちに、その後の人生に及ぶ重荷を生み出してしまう可能性が見出されたことになる⁵⁰⁾。

おわりに —結びにかえて—

本論文では、キュブラー=ロスのテキストを素材として、まずその思想——特に死の理解とunfinished businessについて描出し、次にdying childを取り巻く問題を取り上げてきた。

キュブラー=ロスの死に関わる仕事は、医者立場から出発したが、その枠に留まることなく「死後の生」や子どもの死といった、人間の死に関する幅広い領域に及んでいる。特に本稿で取り上げてきたunfinished businessは、死にゆく人びとの臨床から見出され、人びとが解決しなければならない未表出の感情として、ロスにとって重視されていく。この未解決の感情という位置から見れば、本論文が描出してきた第一の「死を前にした課題」は、一人称の死を迎える人間の視点、また愛する者の死から生まれる第二の「心のしこり」の側面は、二人称の視点からみた未解決の感情と整理される。そして第三の「次世代に受け継がれる可能性をもつ負の遺産」は、子ども期に心的外傷を受けた人間の視点と理解できる。しかし、ロスのunfinished businessは、未表出の感情に限定されるものではないし、それが死にゆく子どもを取り巻く問題、特にきょうだいたちにとっては、より複雑性を帯びてあらわれることは、本稿で見てきた通りである。更に、この概念は、ロスの思想的背景を探り、精神医学との関連を視野に入れて、深化される必要があるだろう。

本稿では、キュブラー=ロスの思想からdying childに論及してきた。そこでは、死にゆく子どもたちに関する問題の一側面が浮き彫りにされたと考える。しかし、死の床にある子どもたちへの視点は、ここに還元されない性質をもっており、子ども論をはじめ世代間の問題としても、教育学や人間形成論で、今後取り上げられ、論じられていく必要があるだろう。欧米での研究に学びながら、死にゆく子どもに関わる研究への取り組みを、今後の課題としたい。

註

- 1) 死の受容の段階説は、自分が不治の病に罹ったことを知った衝撃に始まり、死に至るときまでに人間が辿る5つの心理過程を、段階を追って示したものである。5つの心理とは、「否認」「怒り」「取り引き」「抑鬱」「受容」である。受容の後、最終的には「デカセクス」という虚脱状態で死を迎えるという。この五段階と併行して、患者は一貫して「希望」を持つ。また、遺される家族は、死を迎える当人よりも遅れるが、同じ段階を通過し、受容に至ることが指摘されている。

- 2) 子どもが死ぬという現実を目を向けると、dying childを日本語ではどう表せばよいか、戸惑いを禁じえない。本稿では、従来の邦訳に従い「死にゆく子ども」という表現や、「死の床にある子ども」などの類する訳を用いたり、そのままのdying child表記を使用している。ところで、一口に「死にゆく子ども」と言っても、どの年齢あるいは成長段階にある子どもたちまでを、範疇に収めるのか、という疑問が沸き起こってくるだろう。これについては、死にゆく子どもに関する研究を十分に参照する必要があるが、さしあたり本論文では、ロスがdying childと述べた子どもを中心に、年齢等にこだわらず、より包括的に「子ども期にある子ども」と捉えたい。
- 3) 死に至る子どもについては、欧米において積極的な研究がなされている。そのうち、日本で邦訳され紹介されているものには、発達心理学的視点に立つ『死に行く子供』(W.M.イートン、大阪府立看護短期大学発達研究グループ訳、医学書院、1982)、精神分析や心理療法の視点から書かれた『両手いっぱい時間』(B.M.ソックス、藤森和子訳、法政大学出版会、1999)、フィールドワークを基に、子どもたちが自分が死ぬこと認識する過程を「社会化」として捉えた、ブルーボンド=ランガーの『死にゆく子どもの世界』(死と子どもたち研究会訳、日本看護協会出版会、1992)などがあり、それぞれの立場から死にゆく子どもについての分析と考察が行われている。
- 4) M.C.G.Chaban, *The Lifework of Dr. Elisabeth Kubler-Ross and its impact on the Death Awareness Movement*, The Edwin Mellen Press, 2000
- 5) 日本でロスが積極的に導入されてきた、主に医学や看護、死生学といった領域に目を向けてみると、その重点はやはり、心理変遷の段階説に置かれていると言ってよいだろう。このロスの段階説を基盤に、日本人における受容までの過程と比較検討する試みもなされている。
- 6) 田中毎実『「老いと死の受容」と相互形成』岡田渥美編『老いと死: 人間形成論的考察』玉川大学出版会、p.327
- 7) 同p.323
- 8) この教育的側面に注目したものに、金森俊朗・村井淳志『性の授業死の授業』(教育史料出版会、1996)がある。教室に末期患者を招いて話を聞くというロスのセミナーと同じことが、日本の教育の現場でも行われた。村井は、ロスのセミナーが医学生・神学生らの教育のために企図され始められたことから「私たち教師・教育学研究者がぜひ学ぶべきものは、臨死者との対話が生きていくものに与える教育的インパクトであろう」と述べている(同書p.203)。
- 9) Kübler-Ross, *The Wheel of Life*, 1997, p.10
- 10) Ibid., 1997, p. 91
- 11) ユングからの具体的な思想的影響については、dying childとの仕事でユング派の描画法を用いていたことなども一つの手掛かりに、今後の課題としたい。
- 12) ロスは、自伝で、自らの精神治療を「マンツーマンで(治療にあたる)規格から外れた精神医学」と述べている(Ibid., p.128。※()内筆者註。)。彼女は、当時のアメリカの病院で実際に行われていた集団治療や、向精神性の薬物を投与する薬物療法を用いる「古典的医学の信奉者にはなれなかった」(Ibid., p.138)。当然ながら、ロスの実践は、末期患者と死を語ろうとしたことだけでなく、その方法においても、周囲の同僚の議論の的になった。
- 13) Ibid., p.182
- 14) Kübler-Ross, *Working it through*, 1982, p. 64
- 15) ———, *On Death and Dying*, 1969, p. 276
- 16) この表現は、*Questions and Answers on Death and Dying*, 1974で特に多く見られる。
- 17) Kübler-Ross, *Living with Death and Dying*, 1981, p. 28
- 18) ———, *On Children and Death*, 1983, p.197およびp.199
- 19) ———, *The Tunnel and the Light*, 1999 (本書は、*Death is Vital Importance*, Hill Press, 1995が改題されて出版されたものである。) p.70
- 20) Ibid., p.95ほか。
- 21) ———, *On Life after Death*, Celestial Arts, 1991, p.10ほか。蝶が魂のイメージであることは、アト・ド・フリース(山下修一郎ほか訳)『イメージ・シンボル事典』大修館書店、1984、p.94など。ロスがこのイメージを用いるようになった背景には、第二次世界大戦後間もなく訪れたユダヤ人の強制収容所で、子どもたちが描いたと思われる、蝶の絵が壁に残っていたのを目にしていたことがある。「蝶は永遠の生命の普遍的なシンボル」であり、それを「強制収容所の子どもたちが教えてくれた」と語っている。(Kübler-Ross, *On Children and Death*, 1983, p.170)
- 22) Kübler-Ross, *The Tunnel and the Light*, p.70 この「蝶と繭」については、トランス・パーソナル心理学から諸富祥彦が触れている。(『生きていくことの意味』PHP研究所、2000年)
- 23) ———, *On Death and Dying*, 1969, p.29
- 24) ロスの唱える死後の生は、主に*On Life after Death*で、詳しく述べられている。シャパンによれば、死後の生への探求は、キューブラー=ロスが「死と死にゆくことで用いた方法と同じ」であり、死の受容に至る段階説のように、多くの臨床事例を基に、あくまでも実証的方法論を用いて死後の段階説を唱えたのであった(Chaban op.cit., p.335)。
- 25) Kübler-Ross, *A Letter to a Child with Cancer*, 1979(*The Tunnel and the Light*, 1999,所収。)ダギーへの手紙は、書かれた一年後に子ども向けの本として、公に出版された。
- 26) ロスの手による子どもたちへ向けて書かれたもう一冊の本*Remember the Secret*(1982)においても、死を語るために「蝶と繭」のイメージが用いられている。
- 27) 『カウンセリング辞典』誠信書房、1990、p.531。そこにはunfinished workが併記され、訳語には「未完の行為」、他に「未完成事業」「未完遂ワーク」「フィーリング深化法」が挙げられている。一方、ロスの著作でのunfinished businessは、「未完の仕事」「やり残した仕事」「こころのわだかまり」「未整理のこと」などと邦訳されている。
- 28) 試みに幾つかの点で比較すれば、ゲシュタルト療法では、上記の註にしたがって「行為の完遂」を意味するとすると、ロスの場合は、行為よりもむしろ、抑圧した感情あるいは情動の解決に重点を置いたものと言えよう。一方、臨床的手法の点では、ゲシュタルト心理学のカウンセリングとの共通性、類似性が高いことは確かである。例えば、特にワークショップでは、ゴムホースで物を叩いたり、電話帳を破り裂くといった

行為を伴いながら、激しい情動を表出する。そこには、「あたかも今ここで経験しているかのように、その相手に言いたいこと、内心感じていることを、あからさまに(時により爆発的に)表現すること」というゲシュタルト療法の原理と通じるものがある。

- 29) Kübler-Ross, *On Death and Dying*, p.270 尚、本稿では英語の Siblingにあたる言葉、つまり男女の別ない兄弟姉妹を表現するために平仮名の「きょうだい」を用いている。
- 30) また初期には、同概念だが、unfinished workやunfinished job など、語の用法に多少のばらつきが見受けられる。
- 31) Ibid., p.270
- 32) Kübler-Ross, *The Tunnel and the Light*, 1999,p.138-139
- 33) Ibid., p.10
- 34) 同じ手法を導入したワークショップが日本でも行われている。その主催者、ト部文麿は、アメリカでワークショップに参加し、日本での開催をロスから任された。その経緯、実践については、同氏による『キューブラー=ロス 生と死の癒し:日本に定着したLTDワークショップ』(星雲社、1991)に詳しい。unfinished businessの解決を主題にしている以上、同書ではそれに該当することばや表現が見受けられる。ロスのテキストに基づいて描出するという本稿の試みとは異なるが、ワークショップの精神を汲み、自身の体験と実践を経たト部の、深遠からの言葉があふれており、理解の一助を提示してくれる。
- 35) Kübler-Ross, *The Tunnel and the Light*, p.138
- 36) Ibid.,p.130および *Working it through* p.54
- 37) Ibid., p144
- 38) Kübler-Ross, *The Tunnel and the Light*, p.124
- 39) ———, *To Live Until We say Good-bye*, 1978, p.145-146
- 40) Kübler-Ross, *Lining with Death and Dying*, 1981, p.60
- 41) ———, *The Wheel of Life*, 1997, p.182
- 42) R.Coles, *The Spiritual Life of Children*, Houghton Mifflin Co.,1990, p.101
- 43) Kübler-Ross, *The Tunnel and the Light* , p.30-31
- 44) ———, *The Tunnel and the Light*, p.11
- 45) ———, *On Children and Death*,p.47
- 46) Ibid., p.68
- 47) Ibid., p.47
- 48) Ibid., p.68
- 49) Kübler-Ross, *The Tunnel and the Light*, p.133
- 50) 本稿では、註に留めたいが、子どもたちに用いられてきた「蝶と繭」のイメージは、キューブラー=ロス独自の、スピリチュアル・ケアの一つのかたちであったと筆者には思われる。しかし、このスピリチュアルあるいはスピリチュアリティという言葉には、様々な問題が付き纏っていること(西平直「知の枠組みとしての『精神世界』:共感的理解と批判的検討」(『教育学研究』66巻4号、1999)および「WHOとスピリチュアリティ:健康に関わる事柄としてのスピリチュアリティ」(『UP』30巻7号、2000)を参照。)、そして用語のみならず、ケアという点から医療や看護の実際とも関わってくるので、現段階では断言するには至らない。また、詳細は避けるがWHOや近代ホスピスの祖と言われるシシリー・ソンドースのスピリチュアリティの

捉え方に立脚すると、unfinished businessも、スピリチュアリティの次元に深く関係していることが考えられる。この点についての考察、およびキューブラー=ロスのスピリチュアリティについては、今後の課題としたい。